



BUKKYO UNIVERSITY

教授法 開発室だより

vol.14

編集 / 教授法開発室
発行 / 佛教大学
発行日 / 2006年4月1日
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL.075-491-2141 FAX.075-493-9019

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>

2005年度総括と2006年度展望

教授法開発室 室長 松本真治

2005年度の教授法開発室は、全学的なFD (Faculty Development) の啓蒙に重点を置き、4つの部門に分かれて、それぞれの検証内容および成果を何らかの具体的な形で全教職員に還元するという基本方針に沿って活動を展開してきた。2005年度の活動を検証すると同時に、その結果を踏まえて2006年度の展望について述べてみたい。

1. 教授法開発室活動

1) 科目関連部門

- ・2005年度も、新入生と3回生を対象とした「基礎学力調査」、1回生を対象に入学時と学年末に行われる「英語基礎力調査」を継続的に実施した。今年度は蓄積されたデータを分析し、その結果が学生の学力向上に還元されるような形へと結びつける必要がある。具体的には、カリキュラムや科目のあり方に関する提言、自主学習システムの整備・開発となる。
- ・必修科目「ブッダの教え」、「法然の生涯と思想」、「情報機器の操作」や外国語の「中国語」、「朝鮮語」の教授法に関する検証は、2005年度に新たに発案したものである。残念ながら、室員間での問題点の共有という段階に留まり、具体的な成果をあげるまでには至らなかったが、今後の継続的な議論の萌芽とはなり得たと思われる。

2) 授業関連部門

- ・授業評価アンケートは従前と同様の形式で2005年度も実施した。これまでの結果を踏まえると、アンケート結果の共有とフィードバック、全学的な取り組みとしてのアンケート実施、科目の特徴を踏まえたアンケート項目の作成、紙ベースに代わるオンラインでのアンケートの開発、が今年度の検討課題である。
- ・2005年度の教授法開発室の重点課題として「授業公開」を選定した。2004年度は2つの授業の試験的公開に止まっていたものが、2005年度秋学期には10名の教員による授業公開を実施することができた。2006年度も継続的に授業公開

を実施するが、公開する授業数の増加、参観教職員数の増加、授業公開の成果の還元、等の検討課題が見えてきた。

3) 情報関連部門

- ・2005年度は携帯電話を利用したI-supportシステムの使用最終年度で、限定された規模での使用となり、この部門での特に目立った活動はできなかった。2006年度はこれまでのI-support運用実績を基に、情報システムセンター構築の「佛教大学e-learning」システムに参画し、教授法という観点からこのシステムを本格的に検証していく予定である。

4) FD部門

- ・授業評価アンケートの自由記述欄に書かれた様々な意見に関して、室員間で意見交換を行った（アンケート対象となった教員名、科目名、学生名は非公開）。自由記述欄には重要な指摘がなされていることも多く、このような学生の声を大学として何らかの形で吸い上げる方策が必要であろうという認識のもと、「目安箱」設置の発議を目指すことにした。ただ、きわめて慎重に取り扱わなければならない問題であり、性急に結論を出すことはできず、教授法開発室という小さな組織だけで解決できるものでもない。大学当局との連携を密にしながら、今後も継続的に議論していきたい。
- ・「外国語教育」「国語教育」といったテーマのもとに自由な意見交換のできる場を求めて「FD座談会」を実施し、『教授法開発室だより』誌上に掲載した。今後も、室員以外の有識者との対談を通して本学におけるFD活動のあり方を追及すると同時に、それがFDの啓蒙活動に役立つことを期待している。

2. 教授法開発室活動の成果の具体化

- ・『教授法開発室だより』が教授法開発室の広報的役割を果たしてきたことは事実である。しかしながら、年数回の発行では新しい情報を逐一提供することは難しい、詳細

2005年度総括と2006年度展望

な検証・分析をとまなう大部な記事・論文を掲載するスペースがない、という負の側面を抱えていたということも事実である。そこで、タイムリーな情報提供とFD活動の啓蒙推進を目指して、2005年度より学内報の一部をお借りして「FD Bulletin」の掲載を開始した。また、各活動の学術的な研究報告を公表する場として、2006年度春学期中に『FD Review』を刊行すべく準備を進めている。

- ・3本立ての刊行物により、「検証内容および成果を何らかの具体的な形で全教職員に還元する」という目標達成のための仕掛けの一端は整備できたと思われるが、次の段階として、その真価が問われなければならない。各刊行物の掲載内容、媒体、機能等についての点検が必要とされるであろう。

3. 総括と展望

ここ数年間の教授法開発室活動の花形として、I-support

の存在はきわめて大きなものであった。しかしながら、2005年度はその存在が小さくなり、代わりに「授業公開」「目安箱」「FD座談会」「FD Bulletin」といったアナログ的な活動が前面に出てきた年度であった。2006年度からは「佛敎大学e-learningシステム」への参画によって、アナログとデジタルな領域のバランスの取れた活動ができることを期待している。

教授法開発室も創設より7年目を迎え、各種調査・活動も安定期に入っている。今後はその成果の還元を充実させていかなければならない。刊行物による受身的な形だけではなく、さらには、学内研修会の開催や、大学当局・委員会への提言という積極的なアプローチも視野に入れた活動を展開すべきであろう。

FD活動は本学における授業改善のための取り組みであり、今年度も、関係各位をはじめ、教職員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

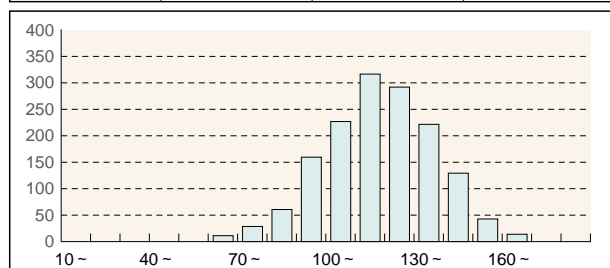
英語基礎力調査について

2004年度より実施しているTOEIC Bridge IPテストを利用した「英語基礎力調査」について、2005年度までの過去2年間の実施実績を報告します。「英語基礎力調査」の分析などの詳細については、改めて報告いたしますので、ここでは実施数のみとさせていただきます。

英語基礎力調査実施実績

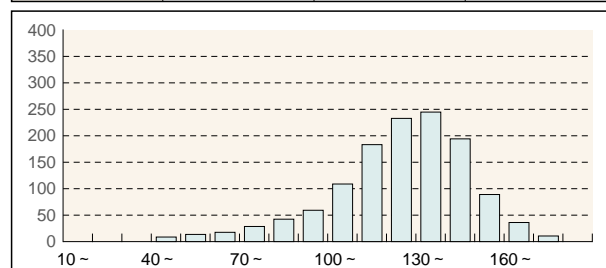
2004年度 第1回

	2004年4月(1,469人)		
	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	117.6	56.8	60.8
最高点	170	86	88
最低点	62	28	30



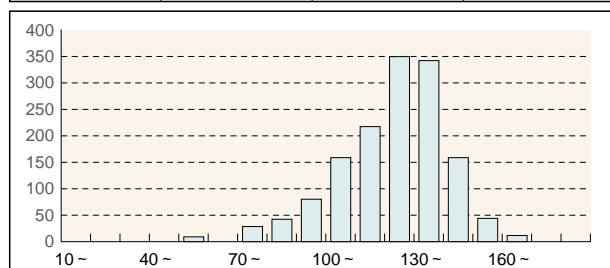
2004年度 第2回

	2005年1月(1,211人)		
	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	123.9	61.6	62.8
最高点	172	86	88
最低点	26	14	12



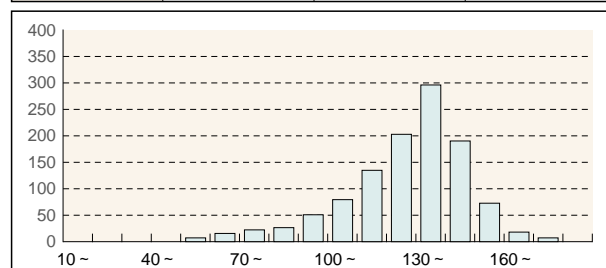
2005年度 第1回

	2005年4月(1,424人)		
	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	122.4	58.6	63.8
最高点	168	88	86
最低点	38	20	12



2005年度 第2回

	2006年2月(1,085人)		
	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	126.9	61.6	65.3
最高点	176	86	90
最低点	46	28	18



I-supportシステム総括

2002年度に試行導入されたI-supportは、佛教大学のe-learningの本格的な稼働を受け2005年度末をもって停止する。今後は大学全体を見据えたe-learningシステムへ参画し、より有効なシステムが構築できるように、教授法開発室も支援を行なっていきたい。

ここでは、試行導入してきたI-supportシステムについて、総括をふまえて述べてみたい。

I-supportとは

I-supportとは、外部業者開発のホスティングサービスであり、学生の自律的学習を支援するラーニングサポートシステムを指す。具体的にはシステムが持つ機能を利用し、情報端末である携帯電話等を介した書き言葉やデータで、教員・学生あるいは学生・学生のコミュニケーションを実現し、学生の自主的授業参加を支援するためのシステムである。

なお、『I-support』とは自律的学習を支援するラーニングサポート（Learning support）を由来とした佛教大学における通称である。

システム導入の経緯

本システムを導入するにあたっては、授業のデジタル化やIT化の流れに遅れることなく、学生の自主的な授業参加を目指し多方向からの検討を行ってきたことを受け、教員と学生の双方向授業や学生間の意見交換等の交流、そしてグループ学習を中心とした学び志向のためのシステム構築を目指した。本システムは講義では不必要という概念が持たれていた携帯電話をツールとして授業運営支援に活用するという逆転の発想から展開されたものである。また、このシステムを構築するにあたっては、本学嘱託教授である西之園晴夫先生が教育方法に利用した『ユビキタスラーニング』の概念が重要なキーワードとなっている。

これらの導入目的を受けて、2002年度春学期より教授法開発室教員スタッフを中心に試行的に活用することとなった。また、2003年度には学生のライセンス数を増やすなどの環境整備を行った。

運用・支援体制

このシステムは教授法開発室の教員スタッフを中心に利用され、その運用については教授法開発室の事務スタッフがサポートしている。また事務スタッフだけでなく、外部業者と連絡を密にとりながら、教員・職員・外部業者の連携体制をもって運用サポートを行い、本システムを活用する教員や学生からの要望などに対応している。

システム機能

機能としては「演習問題」「小テスト」「講義掲示板」「教材倉庫」「メールde相談室」「レポート」「アンケート」「時間割」がある。この機能を利用したリアルタイムな回答・添削によりメディアで指導が可能となり、またデータ集計もリアルタイムで行うことができる。

具体的には、学生の学習履歴も確認でき、復習や進捗状況

を確認することができる。「掲示板」は授業のポータル的な利用をすることにより、意見交換等のコミュニケーションが可能となる。また「時間割」の利用でリアルタイムな出席確認と管理が可能となる。

利用効果

本システムが持つ機能によって、双方向の意見交換や授業内容の理解度の把握等が可能になった。このシステムは、一方通行の授業形態ではなく、情報端末を用いて自らも授業に参加していくことを支援するシステムである。具体的には、授業に無関心な学生が、情報ツールによって双方向のコミュニケーションをとり、提言や意見を出すことで授業参加の意識を持つようになる。それこそが自律学習の展開へと導けるのである。

このように学生の自律的授業参加の効果と、その反応のリアルタイムな把握、必要な場合には授業内容の変更などが可能となる。また情報ツールを利用すれば時間帯を制限する必要もなくなる。

課題

課題としては、教室等施設内での携帯電話の電波受信確保を含めた学内環境の整備が不十分であること 携帯電話の機種によっては電波受信状況が不安定であること 携帯電話を所有しない学生が存在すること 携帯電話を利用することによるポケット等の通信経費を学生が負担すること 資料の容量的な問題などが挙げられる。特に課金の問題については、導入当初の学生の興味関心的な使用から、現在の社会情勢からも経費負担に対する学生の意識変化が感じられる。また、昨今の授業におけるデータやパワーポイント等の大容量な動画・静止画使用が多くなっていることから、教員が作成するコンテンツの使用に携帯電話では限界が生じており授業運営にも制約が生じる。支援体制については、外部業者との連携支援を行ってきたが、ホスティングシステムや地域の関係から支援にも限界がある。

今後の方向性

これらの課題を受け、『佛教大学e-learningシステム』の本稼働に参画することが得策であるとの結論に至り、その有益性は以下のとおりである。『佛教大学e-learningシステム』と『I-supportシステム』の同時稼働による経費的不利益解消 複数支援体制の確立による経費的不利益解消 運用支援の迅速性などである。これらの要因を踏まえ、教授法開発室が試行的に実施検証を行って蓄積したノウハウを活かし、今後さらに改良を加えながら佛教大学独自のe-learningシステムの発展を目指していくこととなった。今後は教授法開発室も教授法改善あるいは開発の点から関っていく必要性がある。

<文責：久保 明>

2005年度授業評価アンケートについて

「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」

、2005年度の活動について

2005年度の部門会議において、以下のような意見をまとめることができた。

「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」担当者全員にアンケートを実施し、必修科目担当者自身として、建学の理念をどう捉え、その具現化を目指した授業をしているのか、また当該科目の今後のありよう等に関する意見を聴取する。

同様のアンケートを担当者以外の全教員に実施し、意識の差がどのように出てくるのかを確認してみる。これらの結果を分析し広報誌に掲載する。

ブッダ・法然の2科目のありようについて、具体的な案を考えて提案していく。例えば必修は1科目2単位とし、担当者によってブッダが法然どちらかにシフトした授業を行う。もう1科目は選択必修科目とし、宗門以外の学内の先生方に、建学の理念に相応しい内容の授業を担当してもらう。あるいは、ブッダ・法然を担当者の持ち回り授業とし、一番伝えたい内容を毎週異なるクラスで授業するような形態を採ってはどうか。10クラス10回の授業の後は、就職とリンクさせた、社会に出て役立つ冠婚葬祭等のマナー講習会、宗教部主催の行事「私たちの法然様」鑑賞を行い、12回分の講義内容とする。

成績は学生が受講した講義のなかで印象深かったものを参考に、法然上人の人物像を述べられるような課題とし、出席回数とあわせて評価する。

2006年度以降、これら2科目については、自校教育の取り組みとリンクさせて検討していくべきであろう。

またその他の意見として、以下のような提案がなされた。

アンケート調査の有効性を高めるには、プレ授業制度導入が前提である。それが不可能なら、4月末を目途に授業登録抹消の手続きをとれるようにする。数回の授業を聞いて興味をもった学生を対象にアンケートを実施する。

FD活動を推進させるには、教育改善のための取り組みに対して手当てを支給することが肝要である。現状では時間と労力をかける教員が報われない。

、2005年度アンケート結果について

過年度より、「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」の2科目に関しては、全クラスでアンケート調査にご理解頂き、実施して頂くようご依頼してきているが、今年度の実績は春学期「ブッダの教え」5クラス、秋学期「法然の生涯と思想」2クラス、および秋学期「ブッダの教え」再履修1クラスの場合8クラスでの実施に留まっている。

授業評価の4項目（授業の内容がよく理解できた、授業内容に興味を持てた、履修によって興味が増した、総合的に満足している）の点数は、総じて「ブッダの教え」の方が高く、過年度からの傾向と一致している。「法然の生涯と思想」については改善の工夫を積極的に試みるべきであろう。

私個人の取り組みとして、前回のまとめを必ず行なう。要点をまとめたものを印刷して配付する。テキストに掲載され

ていない専門用語の説明を行なうなど、これまでのアンケート結果を踏まえて改善してきている。次年度以降、講義担当者による会合を開いて、全クラス共通のサブテキスト（専門用語や重要な概念の説明を中心とする）の開発などを検討していく必要があるように思われる。

また、2005年度は編入生に対してこれら2科目を必ず課すのか、あるいは学部の教育理念を優先させ、資格や免許取得を優先させるのが問題となった。この問題が委員会のレベルで審議すべき問題であるかどうかはひとまず置くとしても、「建学の理念」の具現化する授業であるという位置づけが、どの程度、共通のコンセンサスを得ているのか、またそのようなコンセンサスを得るためにはどのようにすべきであるか、ということをもっと積極的に検討していくべきであろう。

2005年から、授業評価の集計表が一新され、ポイントによって自分の授業に対する評価が明瞭に判断できるようになっている。「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」は全クラスでアンケートを実施する必要があることを改めて強調しておきたい。

最後に、2005年度で室員を辞することになるが、これまでいろいろお世話頂いた先生や事務の方々に厚く御礼申し上げたい。教授法開発室は、すでに退職された教育学部の先生のお声がけによって、文学部の私、教育学部の原先生、社会学部(当時)の岡崎先生が集まり、基礎を構築していった経緯がある。大学として自己点検評価が避けられないものとなりつつあるなかで、形骸化しかねない授業評価アンケートをいかに軌道にのせるかが大きな課題であった。次年度以降、アンケートの実施方法等をめぐって、学長名で全教員に依頼する等大幅な改革が必要な時期に来ていると言えよう。

< 文責：笹田教彰 >

授業評価アンケートの課題と展望

佛教大学では2001年度より授業評価アンケートを実施している。ただしはじめの2年間は、実施を希望する教員だけが行うという方式をとっていたが、2003年度から専任・非常勤を含めたすべての教員にアンケートの実施をお願いするという方式に改めた。

まず2003年度から2005年度までのアンケート実施状況を示した【表1】を見ていただきたい。専任教員のアンケート実施率は、2003年度から2005度にかけて上昇してはいるものの、たとえば春学期では、2005年度には実施率が著しく低下していることも事実である。また春学期と秋学期を比べると、3年間すべてにおいて秋学期の実施率が低いことがわかる。次に学部別に見ると、文学部では春秋あわせた3年間の平均実施率は46.9%、教育学部では53.6%、社会学部では43.3%、社会福祉学部では46.5%となり、実施率だけでは教育学部が一番高く、続いて文学部、社会福祉学部、社会学部の順となる。なお専任教員の3年間全体の平均実施率は

2005年度授業評価アンケートについて

46.6%であり、50%に達していない。また少し気になるのは、社会学部で2004年度春学期が62.9%であったのが、2005年度には26.5%と急激に減少していることである。全体で見ても2005年度は実施率が減少しており、これは教員のアンケートの実施に対する意識が薄れ、ややマンネリ化を起こしたことが原因ではないかと考えられる。

次に非常勤講師のアンケート実施状況を見てみたい。具体的な数字は掲載することはできなかったが、非常勤講師は2003年度から2005年度にかけて、基本的には実施率は徐々に上昇している。非常勤講師の全体の平均実施率は57.4%となり、専任教員の平均実施率と比べると10%以上も高いことがわかる。このような状況が現れた背景にはさまざまな原因が考えられるが、少なくとも、専任・非常勤を含めたすべての教員に対してアンケートの実施をお願いしている状況下において、結果として専任教員の実施率が50%に満たず、さらに非常勤よりも低いということは、大いなる問題として受けとめねばならないだろう。

授業評価アンケートを実施してから5年が経過し、ようやくさまざまな問題が浮き彫りになってきたように感じる。何よりも、専任教員の授業評価アンケートに対する誤解や認識の低さである。授業評価アンケートは教員の人気度を計ることが目的でないことは自明である。しかしどこかで、まだそのような錯覚ともいえる意識が見え隠れしているように思う。アンケートの真の目的は、学生たちの教員およびその授業に対する実直な声を吸い上げることにより、実りある授業運営に供することにある。あくまでも教員と学生双方にプラスの結果をもたらすものでなければ、アンケートを実施する意味はない。学生たちの声に耳を傾け、現在の若い学生たちが大学の授業に何を求めているのかを、教員は真摯に考える責任がある。それは大学教育に携わる者の責務であろう。また、アンケートの結果を教員と学生たちにいかにフィードバックさせてゆくのがもっと問われなければならない。結果を授業展開の中で活用することなくして、アンケートを実施する意味はない。

アンケートの方法、時期、対象、内容、および結果の活用方法に関して、そろそろ抜本的な見直しが必要な時期にきているように思う。過去5年間の実績を踏まえ、今こそ、実りある授業評価アンケートのあり方を模索しなければならない。

< 文責：八木 透 >

比較のため、2003年度も社会学部・社会福祉学部と表記している。

「社会学部」の数値は、社会学科と応用社会学科の数値の合計であり、「社会福祉学部」の数値は、社会福祉学科と健康福祉学科の数値の合計である。

〔表1〕

【春学期】2003年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	35	73	47.9%
教 育 学 部	11	39	28.2%
社 会 学 部※	16	28	57.1%
社会福祉学部※	10	24	41.7%
そ の 他	4	4	100.0%
合 計	76	168	45.2%

【春学期】2004年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	42	71	59.2%
教 育 学 部	28	40	70.0%
社 会 学 部	22	35	62.9%
社会福祉学部	16	23	69.6%
そ の 他	3	5	60.0%
合 計	111	174	63.8%

【春学期】2005年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	46	71	64.8%
教 育 学 部	27	42	64.3%
社 会 学 部	9	34	26.5%
社会福祉学部	11	23	47.8%
そ の 他	1	15	6.7%
合 計	94	185	50.8%

【秋学期】2003年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	19	73	26.0%
教 育 学 部	19	39	48.7%
社 会 学 部※	9	28	32.1%
社会福祉学部※	9	24	37.5%
そ の 他	1	4	25.0%
合 計	57	168	33.9%

【秋学期】2004年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	29	71	40.8%
教 育 学 部	26	40	65.0%
社 会 学 部	12	35	34.3%
社会福祉学部	8	23	34.8%
そ の 他	3	5	60.0%
合 計	78	174	44.8%

【秋学期】2005年度

学 部	実施者数	教員数	実施割合
文 学 部	30	70	42.9%
教 育 学 部	19	42	45.2%
社 会 学 部	16	34	47.1%
社会福祉学部	11	23	47.8%
そ の 他	0	15	0.0%
合 計	76	184	41.3%

第2回FD座談会 国語教育について（後編）

出席者 ■文学部人文学科 坪内稔典／教育学部教育学科 達富洋二／教授法開発室 下野隆喜
前号に続いて、第2回FD座談会の後半を掲載する。



教育実践について

司会 学生の心を掴むにはどうすればいいのでしょうか。
坪内 単純には、第一人者になることです。
達富 第一人者。どういうことですか。
坪内 学生に尊敬させ、ノーベル賞級の学者になることです。
達富 それは、たいへんなことですよね。
坪内 でも、残念ながら我々はそうじゃない。世界的超一流ではない。
達富 でも、学生の要求に応えないといけませんよね。
坪内 僕もそう思います。
司会 学生を、本気にさせる技術は何でしょうか。
坪内 技術を磨き、つけないといけませんよね。
司会 時も忘れて講義が終わるような？
坪内 一時間が、すぐ終わる。先生、もう終わりですかみたいな授業をしないとイケない。
達富 それは授業を組み立てる力であったり、話す力であったり、学生を理解する力であったり、ということですよね。
司会 技術はどうするのですか。
達富 文珍さんなら、話術も長けていますよね。
坪内 我々も話術を磨かなければならないし、中身も当然です。
達富 話術も必要な技術ですね。そういうFDがあっても面白いのですね。
司会 なるほど。
達富 どんな型の講義であっても、学生を魅了すればいいのです。必ずしも派手が良いわけではありません。
坪内 派手は一回通用するけど講義は一回ではありませんから。続けないと。それが大学の難しい所です。
司会 花火が一発では駄目？
坪内 一回なら、なんとかかなる。面白いものを、全て出せばよい。持っているもので、講演をやればよいんですよ。大学の授業は、それではいけない。全然面白くないこともやらなければならぬのが難しいです。
司会 面白くないけど面白いのは、難しい。
坪内 難しいです。面白くないけど、面白く理解させるのが難しいです。
達富 でも、そこがやりがいでしょ。
坪内 結局、学生と議論するしかない。
達富 僕もそう思います。
坪内 議論をして、一緒に考える姿勢があればやれます。だから、教える側の一方的講義はとても退屈になる。
司会 双方向ではない。
坪内 ないです。
司会 教室で共有するような感じですか？
達富 学生を知的に楽しませないといけませんよね。退屈はいけない。僕は「ことば」で学生をもっと楽しませたいですね。
司会 意見を言わないのは多いですか？
坪内 多いです。僕は俳句とか短歌とかやらせているから、初めて喋る者はいます。言葉は、何十年かの生き方がやっぱ瞬間的に出ます。わかった瞬間は宝の時間です。
達富 そういふときの言葉って忘れませんかよね。
坪内 忘れなないと思います。
達富 それは、瞬時の努力であり長い時間の努力ですね。

司会 楽しめないと学べないということですか。
坪内 そうです。
達富 そこです。
司会 距離というか、話せない先生がいるかもしれません。
達富 いないこともないでしょう。
坪内 いますね。
司会 質問したら怒られるとか。
達富 それは、講義以前の問題です。学びたい学生の要求に応えたいですね。
司会 楽しくないのは、どうかと思います。
達富 学びたい学生が楽しまないのは、おかしな話。共有する時間と空間を作らないといけませんよね。坪内先生は、楽しませる努力をされていますか。
坪内 無理な努力は殆どないです。基本的に楽しむと思っている。だから、楽しくなければ言葉が死んでいる。特別になにかしているわけじゃない。
達富 学生が「分かる」「楽しむ」「目覚める」ということは、そこに何かの力があるということですよね。
坪内 短歌を作って、授業は楽しいと大学で唯一息抜きの時間だと書いている。
司会 息抜き？
坪内 息抜きとはね。
達富 そうとしか言えないんでしょうか。
坪内 それしか言い表せなかったわけです。
達富 楽しむ時間があるか無いかと言えば、無いになるのでしょうか。
坪内 だけど、生き生きとした時間を作れたら教師として一番良い。感想を書かすと初めて90分、前を向いていたと書いています。
達富 嬉しい話ですね。
坪内 それが当たり前ですよ。

国語教育の実際について

司会 日本語を楽しめないのは、なぜでしょうか？
坪内 日本語で我々が間違っているのは、日本語は皆がわかっているからこそ一番難しい。お互いにわからないところから出発したら、分かり合う関係が生まれます。最初からわかるという関係で始まるから、そこが間違っていると思う。
達富 もう少し具体的に教えてください。
司会 思いこみですか。
坪内 日本語を使っているんで、わかるということではない。
司会 そうですね。
坪内 思いこんでいるんです。
司会 わかった筈はない。
坪内 そんな筈はないでしょう。
司会 違ってないとおかしい？
坪内 そうです。だけど、わかるところもあります。だから、言葉で通じようとする誤解が大きくなる。
達富 それでも、言葉で表現しちゃうんですよね。
坪内 それは、言葉で通じる以外にないですからですよ。
達富 でも、そこには通じない大前提があるわけですね。
坪内 ほんとうは、通じないかもしれないけれど言葉を使うしかない。そこで伝えあう工夫があって、我々の国語教師の存在価値

値がある。

司会 言葉の工夫ですね。

坪内 どれだけ伝える為の工夫がいるか。学生達に自分の教えを単に喋っても全然通じないです。

司会 一方通行は、面白くない？

坪内 面白くないです。

司会 先生は面白いけど、学生は満足しない。

達富 工夫をしないで、伝わら思っているのでしょうか。

坪内 言葉は通じら思っているから。それは大きな誤解ですよ。教師はこう思うから、おまえもこうと。そんなことはありえないです。

達富 先生は学生の言葉も、聞かれますよね。

坪内 できるだけ、そうします。

達富 学生との会話は、どうでしょう。

坪内 僕の方が勝っています、僕の方が自由です。

達富 僕も負けな自信はありますよね。

司会 先生が？

坪内 僕も、古いけど彼らの方が古い。つまり、既成の観念にとらわれている。

司会 それは、感じられますか？

坪内 感じます。会話のキャッチボールで、わかります。

司会 相手がわかるんですね。

坪内 うん、相手がどんなボールを投げるかすぐわかる。学生の言葉に、古さがある。それを僕が壊せら思える間は、まだ教師ができます。

達富 我々にとって、学生の言葉を受けることは大きな力ですね。

坪内 大きいですね。知らない話題も多いです。卒論で、新しい作家を取り上げる学生がいます。慌てて帰りに本屋で見たら考えの道筋は、まだ僕の方が勝っている。だからこんな風に読む方が、面白いじゃないかと言えます。

達富 なるほど。

司会 そこまで、されるってなかなかないですよ。

坪内 だって、教師はそこまでしないと面白くないもの。

達富 坪内先生がレポート添削は結構楽しいとおっしゃるのはそこですね。

坪内 教師は楽しくないと、してられないですよ。

達富 そうですね。僕ももっと楽しまなくっちゃいけませんね。

坪内 学生達の考えを、壊すのは面白いですね。

達富 それは、わかります。面白いです。

司会 学生は古いですか？

坪内 彼らは言葉を使ってまだ20年足らず、殆どの言葉は受身です。

達富 そうです。自分の言葉をもっていませんね。

坪内 自分で、能動的に表現してないです。

達富 言葉の魅力も怖さも十分には知らないですね。

坪内 その点は僕の方が、マシです。

達富 勿論そうです。僕もマシでしょう。

坪内 大抵、勝っています。

達富 能動的な言葉の使い手になるようにしたいですよ。

坪内 そうです。

達富 僕たちは、そのようにしなければいけないわけです。何らかの手当てをしななければいけませんね。

坪内 そうです。そうすると、学生も言葉を面白いと思わわけです。

司会 小学生は保守的ですか？

坪内 そりゃ小学生なんか一番保守的ですよ。親の言うことをそのまま覚えているだけ。言葉は、全く保守的でおもしろくない。

達富 概念的なことばの使い手というか。思ひのほか「ありのまま」ではないというか。

坪内 美味しいとしか言わなないし、花は綺麗としか言わなない。

司会 言葉が少ないですか？

坪内 いや、言葉が少ないからではなく表現できない。語法を知らないのです。

達富 本当にそうです。言い表わせないんですね。そういう機会に追いつかれないのでしょうか。

坪内 小学校で綺麗を使わなないで、綺麗な表現ということをする生き生きします。

授業公開について

司会 授業公開を、FDでは考えているのですが。

達富 小・中学校の先生は、工夫していますよね。

坪内 工夫していますね。

司会 大学の先生が一番工夫してない？

坪内 僕も、そう思いますね。極論は、小学校の先生が高い給料を貰うのが正しいと思う。大学の先生は専門を話せばよい、小学生を相手にすることがどれだけ大変か、僕も体験してわかった。

司会 学生は、どうすれば？

坪内 基本的に若者は、保守的ですよ。与えられただけで、自分で作ったものはないです。

達富 後ろからの情報で、前からがないということでしょうか。

坪内 自分で独創したものがない。オリジナルは殆どない。既存を使っているだけで保守的ですよ。だから、保守的をどう変えていくかだと言えます。

達富 変えようと思いたいですね。

司会 変えることは、容易ではない？

坪内 容易ではないですが、面白いです。

司会 今は近づいて来ないですか？

坪内 いや、そうでもないです。

達富 そうそう。だから、大学教育は悲観的なものではないですよ。

司会 悲観的な話が多いですが。

坪内 でも実際は、正確にわからない。学生がついてこない、僕は思っていない。

達富 僕も悲観的に思っていないですよ。学生って案外おもしろいものをもっているし、素敵なことでもできる。

坪内 結構、ついて来ます。

司会 反応は、良いですか？

達富 良い悪いは、尺度で変わります。だからこそ、創造する場を、提供したいです。磨くより、まず発揮させたいですね。

司会 そこから議論が始まる。

達富 関係性を持つことです。

司会 関係性？

達富 授業も関係性ですよ。場を提供し関係性を作るのです。

司会 友達とか、先生とか。

達富 マイク一本の授業だけだと、聞くだけでは駄目という場を設定する。

司会 マイクを渡すとか？

達富 マイクだけでは、なかなか反応が返って来ないかもしれないが、僕たちが学生の座席の中まで行くんですよ。ライブですから。

坪内 そうです。だから、多くの学生を相手にしなければいけない。

達富 坪内先生が授業を終ると一番疲れるのが、よくわかります。

坪内 真剣勝負ですから。

司会 学生もそれだけ真剣な授業は、良いと思いませんか？

坪内 思いますよ。きっと。

達富 きっとそうですよね。

司会 本日は、ありがとうございました。

<文責：達富洋二>

座談会を終えて

坪内先生、達富先生とも学生の創作意欲を捉え、講義を言葉で埋めている。日常の国語について興味深い座談となった。(司会記)

第11回FDフォーラム報告

調査・研究部門からは、大学コンソーシアム京都主催の「第11回FDフォーラム」について報告する。

激変する日本の高等教育において、各大学は個性の確立を目指し様々な取り組みを行っている。FD活動が大学教育の個性化・活活化のために不可欠であることは言うまでもないが、昨今、FDという流行がひと段落し、取り組みがマンネリ化してきていることも事実である。この10年間の大学改革の中で一応の定着を見たFD活動の内実を新たな時代に向けてさらに充実するためには、大学教育にはどのようなことが求められているのかという基本点をあらためて明らかにすることが肝要である。

今年度のFDフォーラムは、このような企画段階での共通認識から、「今一度、大学教育とは何かを考えよう」を合い言葉とした。そして、「そもそも大学教育とは何か」を確認し、この基本点に立って「これからの大学教育」について意見交換をしようとの意図で開催された。以下に、その開催内容を紹介する。

基調講演

「これからの時代の大学教育」 安西祐一郎（慶応義塾長）

シンポジウム

「大学教育への期待」

寺崎 昌男（立教学院本部・立教大学総長室調査役）
北川 正恭（早稲田大学大学院公共経営研究科教授）
椋本 洋（立命館大学高大連携推進室教授）

分科会

第1分科会「授業改善 双方向型授業の実践」

実際の授業の中で教員と学生や学生同士の双方向コミュニケーションを実現し、授業内容への学生の理解を深めるとともに学生の主体的な学習を導き出すような具体的取り組みについて議論がなされた。

第2分科会「全入時代における大学の課題 初年次教育・接続教育」

大学全入時代を迎え、初年次教育・接続教育の現状を俯瞰する視座を獲得しながら授業などの実践を一般化した。そして、具体的事例の紹介を通じて今後の教育のあり方について議論がなされた。

第3分科会「短期大学の課題」

「実学」と「教養」との間で、短大の存在意義はどこにあるのか。個性ある短大の創生はいかにして可能なのかの議論がなされた。

第4分科会「大学院大衆化時代の大学院教育 専門知をどう育てるか」

大学院教育（専門教育）の「質保障」に関する話題提供も踏まえて、今後の大学院教育、専門知の育成のあり方について議論がなされた。専門職大学院についても具体的事例や話題の提供がなされた。

第5分科会「FD活動をどう組織化するか FDの具体化と学生の役割」

大学と社会、教員と事務職員、FDセンターと教員あるいは学部や学科、教員と学生などFD活動の組織化について、様々な規模や性格の異なる大学の事例紹介から、そのあり方の議論がなされた。

第6分科会「大学におけるキャリア教育」

ニートやフリーター、離職率の上昇などの問題を踏まえ、高い職業意識・能力を有する若者の育成が益々重要視されている。「そもそもキャリア教育とは」の議論から始まり、社会・企業が求める学生像、大学教職員から発信できる支援などについて意見交換がなされた。

第7分科会「意欲の喚起と動機付け」

「意欲の喚起」や「動機付け」は大学教育の根幹をなすものではないかという積極的な評価がなされる昨今、授業そのものや授業に関連する指導、学生相互の働きかけなど様々な観点・方法から議論がなされた。

第8分科会「大学間授業連携の先進的取組 現代・特色GPとITのO化を中心に」

京都地域を含む全国各地域コンソーシアムでの大学間連携による単位互換・授業連携事業を取り上げ議論がなされた。

以上のような基調講演やシンポジウム、分科会のテーマは、今後、本学において考えていかなければならない課題ばかりである。今後は「FDフォーラム」の成果を、どのように本学のFD活動に生かしていくのかを検討していきたい。

<文責：小林 隆>

2005・2006年度スタッフ紹介

教授法開発室

室長	松本 真治（英米学科）	
室員	笹田 教彰（人文学科）	2005年度
	八木 透（人文学科）	2005年度
	有田 和臣（人文学科）	
	太田 修（人文学科）	
	齊藤 隆信（人文学科）	
	清水 稔（人文学科）	
	若杉 邦子（中国学科）	
	小林 隆（教育学科）	
	達富 洋二（教育学科）	
	近藤 敏夫（現代社会学科）	
	関谷 龍子（公共政策学科）	
	岡崎 祐司（社会福祉学科）	
	藤松 素子（社会福祉学科）	

事務局

教学部長	榎本 福寿（人文学科）	
教学部担当部長	寺内 章	2005年度
	樹下 隆興	
教務課長	水谷 俊之	2005年度
	高田 忠明	
通信教育部学務課長	石田 忠司	
情報システムセンター課長	瀬澤 且博	
教授法開発室課長	久保 明	2005年度
	山本 博子	
教授法開発室主任	下野 隆喜	2005年度
	岸田 恩	
教授法開発室専門職員	山本 理絵	